

## 広島における原爆被災の映像と相原秀二資料について

久保田明子 (くぼた あきこ)

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教



1970 東京都生まれ  
95 立正大学大学院文学研究科修士課程修了  
文教大学附属高等学校地理歴史科講師 (～2015年3月)  
横浜国立大学経済学部飯島渉研究室 (～2004年3月)  
2004 青山学院大学文学部飯島渉研究室 (～2015年6月)  
06 国文学研究資料館リサーチアシスタント (～2014年3月)  
2012 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程入学  
15 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程退学  
現職

### 主な著書

久保田明子『『キツネの足跡』を追いかける—京都大学所蔵荒勝文策関連資料について』政池明『荒勝文策と原子核物理学の黎明』京都大学出版会、2018年3月、315～334頁所収

### 主な論文

久保田明子「収蔵史料目録の『史料情報共有化データベース遡及入力について』(アーカイブズ研究系「アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究」プロジェクト編『アーカイブズ情報の資源化とネットワーク(国文学研究資料館 平成16年度～平成21年度研究成果報告)』人間文化研究機構国文学研究資料館、2010年2月、137～148頁、所収

久保田明子「科学史関連のアーカイブズに携わって：アーカイブズ学側から」『科学史研究』第3期 第54巻 第272号、20～21頁、2015年1月、所収

久保田明子、杉原清香、田代聡「原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」について：医学調査映像を中心に」『長崎医学会雑誌』93(特集号)、283-287頁、2018年12月

Akiko KUBOTA, Kaori IIDA, Satoshi TASHIRO, 'Atomic Bomb Survivor Studies and their Current Significance: Comparison between the Practices of the ABCC-RERF and the RIRBM.' "Hiroshima Journal of Medical Sciences" 69 (1), pp.1-8., March, 2020.

## 1. はじめに

本稿では、日本映画社(以下、日映)に所属し、準備段階から奔走しながら1945年9月以降にスタッフの一人として被爆地(広島・長崎)に入って撮影を実施し、原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響(Effects of the atomic bomb on Hiroshima and Nagasaki)」(以下、「エフェクト」)の製作に携わった相原秀二氏(あいはら しゅうじ、本名は秀次、本稿では一部を除き秀二で統一する、1910-2008)の資料に関連するいくつかの事項について述べる。

筆者は現在、広島平和記念資料館が所蔵する相原秀二氏の資料(相原秀二資料)と筆者の所属先である広島大学原爆放射線医科学研究所(以下、原医研)が所蔵する「エフェクト」のフィルム資料について研究している。本稿はこの継続中の研究について、その一部をまとめたものである。具体的には、

- (1) 原爆被災に関する映像について現在確認できる状況の整理
  - (2) 相原秀二氏の履歴と相原資料との関連
  - (3) 相原秀二資料の資料構造概要
- に焦点を当てて述べる。

## 2. 原爆被災の映像フィルムの状況

### 2-1. 「エフェクト」以前の映像資料

以下の表1は、エフェクトが撮影される以前に、広島において原爆被災の状況を日本人が撮影したとされる映像について確認したものであり、被爆直後から時系列に並べたものである。本表は、2009年に中国新聞に掲載された、西本雅実記者によって書かれた記事を基盤にしている。

表1 「エフェクト」撮影以前の原爆映像の状況（1945年8月6日～同年9月5日、広島）

撮影時期	撮影者など	現状
1945年 8月6日	河崎源次郎氏（広島市民（缶詰製造会社経営）、自身も被爆者）の8ミリカメラによる撮影	現存確認できず：広島通信病院院長の蜂谷道彦氏の勧めもあり、1963年1月に広島平和記念資料館に寄贈した可能性が高いが、現存しない。
1945年 8月8日 以降	土屋斉氏の証言：同盟通信大阪支社のカメラマンが広島入りし、撮影→同年8月11日に送られたフィルムが東京に到着し、陸軍参謀本部で試写→その後、米軍に接収された、とされる	現存確認できず：アメリカ国立公文書館には収蔵されていないことが確認されている
1945年 9月3日、 同5日	日映製作の「日本ニュース第257号」（1945年9月22日公開）の撮影が行われたと考えられる →9月3日の根拠：同日に実施された昭和天皇が派遣した永積寅彦侍従の視察場面がある <sup>注1</sup> →9月5日の根拠：未編集フィルムの映像の最終カットに「撮影9月5日」の手書き文字がある	「日本ニュース第257号」は現在NHKが所蔵する  未編集フィルムの複製が中国放送にあるとされている

注1 加納竜一、水野肇（1965）によれば、日映の東京本社からカメラマンが同行した、とある<sup>1</sup>。  
出典：西本雅実（2009）<sup>2</sup>、加納竜一・水野肇（1965）

現在残る原爆被災を捉えた写真も大変に貴重なものであるが、写真に比べて機器類も大掛かりで専門性や技術も更に問われ、保存等も難しい映像は、そのために扱える人数も少なくなるため、残りにくい状況となる。そのため、希少価値も高まり、また社会も、まだどこかに埋もれている映像があるのではないかと関心を持ちやすく、注目されやすい。

また、この大変な惨状の当日に撮影した、現存は確認できないとは言え1960年代までは残っていたと伝えられている唯一の映像が、ジャーナリストや映画会社の人間ではなく、映像撮影を趣味としていた広島の一市民の手によるものである、ということは、非常に興味深いところである。彼は報道としてでも記録映画としてでもなく、自身の生きるその街の、見たこともない状況を眼前にして撮影したのであろう。

報道としての映像の最初は1945年8月8日以降の同盟通信大阪支社のカメラマンものとされる。現存の確認ができないが、敗戦以前であったため、これを見た軍部はこの映像を大変重要な機密事項としたであろう。加納竜一、水野肇の著書によれば、日映大阪支社のカメラマンである柏田氏が8月11日に広島に入り撮影を試みたが、広島の司令部からは「広島は要塞地帯でもあり、また今回の爆

<sup>1</sup> 加納竜一・水野肇（1965）p.31.

<sup>2</sup> 上記は以下を参照して作成した：「中国新聞 ヒロシマ平和メディアセンター」掲載（2020年2月14日確認）<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=940>

弾は相当強力な爆弾であり、その様子をニュース映画に収められては、アメリカはより以上の爆弾を落とす可能性が強いから、軍の報道員であっても絶対写させないと強く撮影を拒否されました」とある<sup>3</sup>。「軍の報道員であっても絶対写させないと強く撮影を拒否されました」という部分は、上記の同盟通信大阪支社のカメラマンの話と差異があるが、そういう撮影拒否の態度は戦争がまだ終わっていないこの時期には当然ありうることであり、且つ映像が敗戦後に米軍に接収されるのもまた理解できる。米国側としては、初めて人類に向けて使ってみた新型兵器の「効果」を確認することは、既に当時ある程度の予想がついていたであろう、その後の核を巡る世界状況（冷戦）で主導権を取るためにも重要であった。可能な限りの資料をアメリカは求め、多くの被爆関連の資料を接収したが、映像はそのわかりやすさにおいても特に重視されたであろう。そういう点でも、原爆被災の映像は日本には更に残りづらい状況であったと考える。

## 2-2. 原爆記録映画「エフェクト」

1945年9月20日ごろから撮影を開始した「エフェクト」は、日本人の撮影した早い時期の原爆被災映像の情報のなかで、現存の有無を考慮せずに考えた場合、撮影順が4番目である可能性が高い。もっとも、現在多くの人が入手しやすく、目にする機会も多い日本人撮影による原爆被災の映像という条件であれば、「唯一」となる。「エフェクト」は、媒体（DVD）を購入することも可能である。広島平和記念資料館の展示でも、映像の一部が採用されている。

現在の私たちにとってこの「エフェクト」は、そういう点では、原爆被災の実相を検討するときの重要な分析の対象であり、1つの象徴となっている。テレビ番組などの映像を流す媒体では資料映像としても活用され、映像そのものが既に「原爆被災の実相」を示す資料（史料）となっている<sup>4</sup>。私たちは、ストーリーやエピソードの流れのある1つの「映画作品」というよりも、映っている風景、人びと、科学的な分析を示す図表やナレーションに目や耳を留めやすい。また一方で、「映画作品」としての検討（映画史研究（「エフェクト」という作品についての研究）もされている<sup>5</sup>。

しかしながら、現在そういう位置づけで注目され、今後さらに重要視されるだろうこの映像作品が、どのように製作され、どのような経緯で現在に至るのかという、「エフェクト」についての歴史的な検証や調査は、現在のところ十分とは言えない。それは、そういった調査研究を可能にする資料が活用されやすい状況にない、ということとも関連するであろう。その点、相原秀二資料は数々の資料の中でも整備が進められて活用しやすい貴重な資料ではあるが、今後は更に総合的な視点を持ちながら、詳細な調査研究が望まれる。それが進めば、上記のような「エフェクト」を史料として捉えるとき、あるいは映画研究の対象と考えるときにも新たな視座をもたらすかもしれない。「エフェクト」のなかに映っているものを見てなぜその場面を写したのか、どうして映画にこの場面をこのタイミン

<sup>3</sup> 加納竜一・水野肇（1965）p.31.

<sup>4</sup> 例えば、後述する大矢（2012）など。

<sup>5</sup> 例えば、阿部・マーク・ノーネス（1999）など。

---

グで入れたのか、というようなことを考えるとき、その「エフェクト」がどのような経緯で製作されたのかを知っているかどうかは、その検討の選択肢の幅が増えることにもなり、結果、より深く研究ができることとなると考える。例えば、8月6日当日の河崎氏の撮影した映像がもし見つかったとき、それと「エフェクト」とには一体どういった違いが見えてくるであろうか。

### 3. 相原秀二の履歴と資料との関係

#### 3-1. 原爆以前の相原秀二

資料の生成者である相原秀二（1909-2008）の履歴は、1981年7月に飯島宗一との共編で刊行された『写真集 原爆をみつめる：1945年 広島・長崎』の著者紹介の記述（恐らく本人も確認している記述であろう）が、原爆記録映画とのかかわりの部分がわかりやすい。以下に引用する。

1909年愛媛県松山市に生まれる。1939年十字屋文化映画部入社。戦時企業統合で日本映画社企画部に移籍。日映の原爆記録映画では加納竜一らとともに製作を担当。理研仁科研究室ほかとの準備打ち合わせに奔走し、広島、長崎の現地撮影では物理班の演出を担当、また医学班などとの連絡調整にあたる。長崎の第2撮影では統括責任を果たした。以後現在にいたる36年間、個人として原爆災害の調査研究に没頭し膨大な資料を収集。ライフ誌の原爆特集号（1952年）、仁科記念財団編『原子爆弾：広島・長崎の写真と記録』の編集執筆にも関与した<sup>6</sup>。

十字屋とは1874年に原胤昭（はら たねあき、1853-1942、クリスチャン、実業家）が東京・銀座に開いた書店であるが<sup>7</sup>、十字屋楽器店として撮影機、映写機フィルムの販売を開始したことを契機に、1921年、十字屋映画部が設立した。そして1938年に文化映画部と改称し、1941年に日本映画社に統合されるまで存続したという<sup>8</sup>。

この時期の十字屋文化映画部には、「科学映画の父」、「科学映画の鬼」、吉岡有文氏によれば「教材映画の鬼」とも言われる太田仁吉（おおたにきち、1893-1954）がいた<sup>9</sup>。太田仁吉、科学映画、教材映画、文化映画については、映画史や科学史での研究を詳細に参照し検討すべきであるためここでは議論しないが、相原がこの文化映画部に所属した時期は、太田仁吉らによる科学映画が盛んに製作され、「科学映画とは何か」、「文化映画とは」というような議論も活発に行われた時期であった。そのことは当時文化映画部に所属していた相原に大きな影響を与えたと考えられる。例えば相原は、当該時期に相原秀二名義で『文化映画』、『教材映画』、『キネマ旬報』などに記事を掲載しているが、いずれもこういった影響

---

<sup>6</sup> 飯島宗一・相原秀二（1981）所収

<sup>7</sup> 原胤昭については、村上（2001）などの研究がある。

<sup>8</sup> 以上、十字屋文化映画部についての記述は吉岡（2017）p.98、による。

<sup>9</sup> 吉岡（2017）p.111。

下のなかでの執筆であろう（表2参照）。そしてこれらの経験は、原爆記録映画の製作時に重要であったと考える。日映として、あるいは相原個人としても、原爆被災という未曾有の出来事を経験した地に入って記録映画を撮影するとき、多くの議論をしたはずである<sup>10</sup>。その際には、上記のような十字屋文化映画部時代から日映時代までの相原の、あるいは日映のスタッフの科学映画製作の経験、例えば取材の仕方、事前の調査や必要な学術的研究の調査の仕方、撮影などのノウハウが多く活かされたはずである。現在、研究対象としている広島平和記念資料館所蔵の相原資料は、「エフェクト」の撮影に関する資料でそのほとんどが占められているが、こういった日映や相原の原爆以前の経験・状況があったことを踏まえて資料を考えることは、アーカイブズ学的検討（資料整理の在り方、考えられる資料活用の検討）としても合理的で有効であろう。そしてそれは、原爆被災の実相を研究や映画史（科学映画製作史）の研究の可能性も広げると考える。

表2 相原秀二作成記事（原爆以前、1938-1942年）

著者	記事タイトル	掲載雑誌	刊行年
相原秀二	興行情勢 今年上半期の検討と反省	『キネマ旬報』322	1938年
相原秀二	フランスの文化映画	『文化映画』1(6)	1938年
相原秀二	昭和十三年の感想	『キネマ旬報』338	1939年
相原秀二	ニュース映画の分布について(3)	『キネマ旬報』344	1939年
相原秀二	ニュース映画の分布について(4)	『キネマ旬報』345	1939年
相原秀二	陸奥の旅	『教材映画』(62)	1940年
相原秀二	製作報告「食用蛙」	『文化映画』1(11)	1941年
相原秀二	文化映画の上映形態	『文化映画』1(2)	1941年
相原秀二	シナリオ 珪藻土地帯	『文化映画』1(8)	1941年
相原秀二	昭和十六年回顧 製作企画の省察	『文化映画』2(1)	1942年

注：国立国会図書館NDL ONLINE <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>にて検索して確認し(2020年2月14日)作成。  
\*表2および3について：国会図書館で検索できる情報が全てではなく、相原が書いた記事はほかにもあるが、本稿では傾向をつかむという意味で作成した。

十字屋文化映画部が1941年に統合された日本映画社（日映）は、もとは日本ニュース映画社と言い、1940年4月に設立された。戦争遂行のこの時期、同社は、朝日・大毎東日・読売・同盟通信の4つの新聞通信社のニュース映画を統合したという。その後、1941年に日映に改組され、東宝や松竹などの文化映画製作組織を吸収合併したが、その一つに十字屋文化映画部があった<sup>11</sup>。この展開は日本の映画史、あるいはマスコミ史を検討するうえで重要なところだが、本稿での注目は、

- (1) 日映が企業統合の母体であったということから、同社が日本政府（関係省庁）とのつながりを持っていた（戦後もある程度はその関係を保持していた）と考えられる
- (2) 相原が籍を置きはじめた1941年の日映には、「科学映画」、「教材映画」、そして「ニュース映画」を製作する専門家が集結していた

<sup>10</sup> 例えば、加納竜一・水野肇（1965）など参照。

<sup>11</sup> 以上は、「日映アーカイブ」の沿革のウェブページ <http://www.nichieiarhive.com/history.html> を参照した（2020年2月14日確認）。

の2点である。

(1) に関しては、それが1941年当時の日映の望む形であったかはともかく、戦後、原爆の被災地で撮影を行う際にはある程度の効能があったと考える。日映が撮影に挑んだ時期はアメリカ主導の占領が始まっており、制約や規制等非常に難しい問題があったはずである。また、先に挙げた通り、戦争終結前には軍事機密という点で広島司令部が日本の報道機関に被災状況の撮影を禁止したという話もあった。こういった、原爆を投下し占領を実施するアメリカとしては大変警戒する事例に一企業（一映画会社）が太刀打ちできるとは考えにくい。しかし、日映は、数々の難題に立ち向かいつつ、いくつかのトラブルに見舞われながらも、撮影を実施できた。この撮影が「可能」であったことは、アメリカともある程度の交渉ができたであろう日本政府や関係省庁、あるいは有力な機関とのチャンネルを持っていたことを想像させる。具体的には、文部省（当時）、その管轄下にあった学術研究会議（当時）、あるいは理化学研究所（仁科芳雄）があるだろう。

(2) は、前項の議論と多少重複するが、「エフェクト」の映像製作のレベル（品質）は低くなかったということを示すと考える。一方で、8月6日当日に撮影した河崎氏のような撮り方ではなかったことも示す。これは河崎氏の映像が劣っているということではなく、「エフェクト」は、学術研究会議と連携して、映画会社として、ある意図をもって製作されたものだ、という違いである。本稿では本件は紙幅の関係もありその点は論じない。しかし、相原秀二資料の内容が「エフェクト」を撮影するときの経験やメモ書きなどの文書、写真などが核となっていることを考えると、この視点は、日映の撮影班が、あるいは相原が、どのような目的意識をもって撮影したのか（例えば、相原をはじめとする当時の日映が被爆地をどう撮影していくか、どういう「映画」を撮ろうとしたのか、どういう考えや議論があったのか）、を検証する点で重要と考える。

### 3-2. 原爆以後の相原秀二

表3は、国立国会図書館の検索システムで調べた結果をもとに作成した、原爆後に書かれた相原執筆記事や編纂でかかわった書籍のリストである。

まず、自身の名前の表記が本名の「秀次」に変わっている。戦後最初のもの確認できたのは、1952年の『改造』33（17）に掲載された、三木茂との共著の

表3 相原秀二作成記事（原爆以降、1952-1983年）

著者	記事タイトル／編集等で関連した書籍	掲載雑誌／出版者	刊行年
相原秀次、三木茂	アイモの戦慄：カメラマンの見た広島、長崎	『改造』33（17）	1952年
相原秀次	人生閑話：被爆28年目の視座	『望星』13（12）	1972年
仁科記念財団編纂 <sup>注2</sup>	『原子爆弾：広島・長崎の写真と記録』	光風社書店	1973年
相原秀次	寄稿：戦後史の原点として“戦略爆撃調査”を考える：30年目の回想と提起	『マスコミ市民』(84)	1974年
飯島宗一、相原秀次	『写真集 原爆をみつめる：1945年広島・長崎』	岩波書店	1981年
相原秀次	上田家の古文書（追記）（天草陶石と高浜焼に関する上田家の古文書（資料紹介））	『古美術』58号	1981年
白井秀雄、相原秀次	『原爆前後』（上）（下）	朝日新聞社	1983年

注1：国立国会図書館NDL ONLINE <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>にて検索して確認し（2020年2月14日）作成。

注2：1973年刊行の『原子爆弾：広島・長崎の写真と記録』については、書誌情報では相原の名前は上がっていないが、刊行の際には相原が多大な協力をしたことで知られているので、記載した。

ものである。三木は、原爆の学術調査の際は土木建築班を担当した日映の社員である。これが「1952年」であることは、占領終了（1952年4月28日に日本は主権回復する）と関連するであろう。実際、この号の『改造』は、「この原爆禍：再び世界の良識に訴える」という特集の増刊号であった。目次には、玉木英彦、杉本朝男、武谷三男、早川幸男といった物理学者や原爆文学の大田洋子などの名前が並ぶ。「ABCCの内幕」と題する文章もある。今までプレス・コード等の規制もあって自由に語る／論じることができなかつたことが噴出するような号である。そこに、原爆学術調査に参加した物理学者や被爆した文学者たちとともに、被爆地と調査を行った学者やそこに生きる人々を撮影した日映関係者が名前を連ねる資格は十分にある。そして、そのポジションに相原がいた。

1970年代前半にも記事がいくつか見られるが、これは「被爆30年」の1975年を迎える、というタイミングであるとともに、「エフェクト」について大きな動きがあった後の時期でもあった。アメリカに接収されたまま日本で見ることができず「幻の映画」と言われた「エフェクト」は、1967年11月9日に、アメリカ政府より日本の文部省へ返還された<sup>12</sup>。その後、「エフェクト」は公開されるが、その際、文部省が映像の一部を削除して上映し、問題化した。相原がこの映画の返還や公開の問題に関心が無い訳がない。彼は「エフェクト」をノーカットで公開することを求める運動にも参加していたとも言われる<sup>13</sup>。

1974年の『マスコミ市民』に掲載された文章が、戦略爆撃調査、つまりはアメリカの戦略爆撃調査団に関する記事であることも興味深い。戦略爆撃調査団は、アメリカ側の原爆被災の調査を行う組織であり、「エフェクト」の製作にも大きく関与した<sup>14</sup>。また、この時期から1980年代までの相原は『原子爆弾：広島・長崎の写真と記録』、『写真集 原爆をみつめる：1945年広島・長崎』、『原爆前後』（上）（下）など、原爆関連の書籍の編纂や刊行への協力も行っている。このように、相原は戦後も長く原爆に強くこだわり、発信を続けたことがわかる。そして相原秀二資料は、このような活動の証左ともなるものと考えられる。つまり、同資料は、単なる「エフェクト」の製作資料（映画撮影資料）ではない、ということである。

また1点、1981年の古美術に関する記事は、目を引く。しかしこれもまた、日映を退社したあと中央公論美術出版に勤務した経歴も考えれば、そのような方面にも関心があったと想像することはおかしいことではないであろう。彼はまた大佛次郎との交流もあった<sup>15</sup>。このような、美術や文芸方面への相原の関連を示す資料は、ごく少数であるが、やはり相原秀二資料のなかにあり、相原の戦後の人生が決して原爆一色ではなかつたことを証明している。

<sup>12</sup> 例えば「幻の原爆映画 22年ぶりに帰国」朝日新聞（東京、朝刊）1967年11月10日付に「九日夕、文部省に里帰りした」とある。

<sup>13</sup> 落葉（2007）p.97.

<sup>14</sup> 落葉（2007）によれば（pp.101-102.）、相原秀二資料に「米国戦略爆撃調査団の映画製作について関係課への通達文書（1946年5月24日付）」がある。これは相原ら4名の日本人が戦略爆撃調査団の映画制作のために雇用されていることが記されているとのこと。

<sup>15</sup> 相原氏の日映退社後の就職や大佛次郎との交流に関しては、広島平和記念資料館所蔵の相原秀二資料による。

## 4. 相原秀二資料の資料構造概要

### 4-1. 相原秀二資料の寄贈の経緯：広島のは広島へ、長崎のは長崎へ

相原秀二資料は、現在、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館の2か所で所蔵されている。以下の表4は、それぞれについての寄贈、内容（物量）、資料活用（展示）の状況を示している。

表4 相原秀二資料の寄贈状況

最初の寄贈：1999年に相原氏本人から埼玉県平和資料館へ寄贈		
その後の状況	広島分：広島平和記念資料館	長崎分：長崎原爆資料館
寄贈	2004年度に始まった被爆資料等の全国収集事業の一環として、将来的な保存・活用の点から広島平和記念資料館に寄贈される	2007年10月に長崎原爆資料館に寄贈される
内容（物量）	・段ボール箱3箱、バインダー241冊、封筒72袋 その他、書籍や資料の束などがあつた ・整理作業の結果、以下の点数を確認： 文書類2,683点、写真類8,279点、書籍211冊	全122冊 長崎原爆の写真、長崎医科大学・三菱長崎造船所・城山国民学校などの被害記録、長崎学徒動員の記録、被爆者の証言など
資料活用（展示）	企画展「廃墟にフィルムを回す：原爆被災記録映画の軌跡」 広島平和記念資料館 2009年2月25日～7月15日	企画展「原爆を記録する：相原秀二資料展」 長崎原爆資料館 2010年6月15日～7月31日、9月3日～9月30日、12月20日～翌2月28日開催

出典：落葉（2007）、大矢（2012）などを参照して作成

上記のことから、以下のことがわかる。

- (1) 相原秀二資料は、本人の取捨選択を経たものが寄贈されて残っている。
- (2) 相原秀二資料は、広島と長崎において、時間をあまり置かず、資料の整理を行い、展示を実施している
- (3) 相原秀二資料を検討、活用するときは、広島と長崎の両方の分に留意する必要がある

(1) について：個人の資料が残される場合、没後にご遺族などから取捨選択なくまとめて寄贈されることが多いが、相原秀二資料は本人が自身で「平和」の博物館（平和博物館）に寄贈している。そのため、相原秀二の個人的な資料や「原爆」の関連が薄いものについては意図的に排除し、寄贈先に相応しいものを選んで寄贈した可能性がある。その点では、相原秀二資料だけを見て相原秀二の人物像を形成することは難しいところがある。また、相原秀二の評価によって寄贈資料は選別されている。つまり、相原秀二が不要だと判断したものは寄贈資料に含まれていない可能性がある。

(2) について：広島と長崎において、寄贈を受けた後にすぐに資料整理が行われ、社会発信として展示を実施したことは、相原秀二資料を社会に広く知ってもらい、活用してもらうことを促すこととなったはずである。

(3) について：広島に関連するものは広島に、長崎に関連するものは長崎に、ということで2つに分けられたと考える。これは、両資料館が展示などで活用する場合は合理的な側面もあるが、完全に分けきれない資料もあるはずであり、例えば広島分のなかには、長崎に関連する資料も含まれている。そのため、相原秀



二資料を活用した研究を実施する際は、その主題にもよるが、可能な限り両方に留意する必要がある。これはマイナスな側面という訳ではないが、ユーザー側にとっては調査研究の手数が少し複雑になる。それはまた、資料を活用した調査研究がなかなか広がらない要因にもなりうるであろう<sup>16</sup>。

もし活用の発展を促進しようとするならば、例えば、博物館において相原秀二資料の展示を適度に行う（様々な資料を公開する／複数回実施する）、目録を作成して公開する、保存の観点と活用の発展という目的の資料のデジタル化、という方法もあるであろう。しかしながら一方で、この“平和博物館”の主たるミッションとは必ずしも言えない手間のかかるこういった業務をそれぞれの資料館に強く求めてよいものかは躊躇するところでもある<sup>17</sup>。

#### 4-2. 相原秀二資料の資料構造概要：広島分と長崎分のそれぞれの特徴

落葉（2007）によれば、広島分は文書、写真、書籍に大別され<sup>18</sup>、中には、例えば、特徴的な資料の一つとして6冊からなる『原爆記録映画誌（相原日誌、以下、相原日誌と記す）』がある<sup>19</sup>。この相原日誌は、1945年当時の資料ではなく、後年、相原氏が当時を思い起こして時系列順に書き起こした日誌である。そして、この日誌を執筆するために見直された文書類も日誌に挟み込まれたり、あるいは別置で所蔵されている。つまりは、この日誌は、相原氏にとって原爆関連の自身の調査の集大成的位置付けであったと言えよう。そのため、資料全体を読み込むにあたってはインデックスのような役割も期待できる。そして当然、ここには長崎の原爆に関する記述も含まれる<sup>20</sup>。

また、落葉（2007）では、上記の相原日誌以外にも、同資料内の特徴的なものとして、

- ・撮影記録報告用紙
- ・映画製作の原案
- ・映画解説原稿
- ・米国戦略爆撃調査団の映画製作について関係課への通達文書（既述、注13）などを挙げている<sup>21</sup>。これらは、広島と長崎とに分けることができない、「エフェクト」製作に関連する基本的な資料と言えよう。

<sup>16</sup> 長崎総合科学大学の矢野正人氏は、相原秀二資料の長崎分と広島分の両方を調査し、長崎の原爆の残留放射線の問題に関する研究を報告している（大矢（2012））。

<sup>17</sup> デジタル化について。筆者は広島平和記念資料館資料調査研究会で採択していただいている研究課題「原爆記録映画の基礎研究：広島平和記念資料館所蔵相原秀二資料と広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵映像資料について」で、3年間、相原秀二資料のデジタル化を少しずつ進めている。デジタル化対象の資料については、同館の担当である落葉裕信学芸員とともに相談の上選んでいる。但し、全体のデジタル化については程遠く、またこのデジタル化資料の活用については今後の検討課題である。

<sup>18</sup> 落葉（2007）p.98.

<sup>19</sup> 落葉（2007）pp.99-100.

<sup>20</sup> 大矢（2012）では、同研究の際に、広島平和記念資料館所蔵分では、分類番号 AH01-0007～AH03-3844 中の長崎関連部分を調査した、とある（p.21.）。また参考文献として特に「原爆記録映画誌1～5」を挙げている（p.71.）。

<sup>21</sup> 落葉（2007）pp.101-102.

---

以上のことから、広島平和記念資料館には、広島分とともに「エフェクト」製作にかかわる根本的な資料が含まれていることは明らかだ。これは広島平和記念資料館所蔵分の重要な特徴であろう。つまり、長崎の原爆被災に関する「エフェクト」の調査研究をするときは、広島平和記念資料館所蔵分にもあたる必要がある、ということであり、こういった情報は資料を活用したいユーザーには周知したほうが良いと考える。

また、広島分と長崎分を分けたのは誰がどのように実施したのか、ご本人の確認があったのかは現在ではわからないが、広島分の中に長崎分があるのであれば、やはり長崎分のなかに広島分が入っている可能性はあるであろう。その点では、上記同様、広島原爆被災に関する「エフェクト」の調査研究をするときは、長崎原爆資料館所蔵分もまた留意したほうがよいということである。

一方、長崎分では、大矢（2012）によれば、長崎原爆の写真、長崎医科大学・三菱長崎造船所・城山国民学校などの被害記録、長崎学徒動員の記録、被爆者の証言などがあり<sup>22</sup>、相原秀二資料の今後の課題として、「相原資料には人的・社会的被害に関する資料も多数含まれている。記録映像にはない家庭・地域社会の崩壊による人びとの生活破壊の実態を、被爆者の証言、工場・学校などの被害状況、学徒動員の被災状況の資料を基に明らかにし、原爆被害の実相を「社会的記憶」とするために役立てることも重要な課題である」と指摘している<sup>23</sup>。

こういった「人的・社会的被害に関する資料」は、広島資料（広島平和記念資料館所蔵分）のなかにもあるが、先に述べた略歴に「長崎の第2撮影では統括責任を果たした」とあることから、これらは、長崎原爆資料館にある長崎分の資料のなかで特徴的な位置付けとなっている可能性は高い。また、長崎医科大学・三菱長崎造船所・城山国民学校といった、長崎の原爆被災を考える際に重要な、ある特定の地点（組織）の被害に関するまとまった資料があるというのも、広島分の資料とは少し違う様相と言えるかもしれない。

## 5. おわりに

本稿での要点を以下にまとめる。

- (1) 「エフェクト」は、現在もっとも多くの人々に見られる（見られる機会が多い）、日本人が撮影した唯一の原爆被災の記録映像資料である。そのため、その映像の成立過程や歴史的経緯を分析することは必要であり、その調査研究に相原資料は必須である。
- (2) 相原秀二が「科学映画」「文化映画」「ニュース映画」の製作会社であった十字屋文化映画部、日映の社員であった履歴は、「エフェクト」製作に十分に生かされたと考える。そしてそれは、相原秀二資料の特徴の要素となっている。
- (3) アメリカに接収された「エフェクト」が日本に返還され、公開についての問題が起きる1960年代後半や「被爆30年」を迎える1970年代など、相原氏

---

<sup>22</sup> 大矢（2012）p.21.

<sup>23</sup> 大矢（2012）p.71.

は原爆投下後（「エフェクト」撮影後）も長く原爆および「エフェクト」に強い関心を持ち続けた。相原秀二資料には、その時期のものも含まれている。また、芸術・文芸に関連する資料もある。そのため、本資料は単に「エフェクト」製作のみに特化した資料ではないと言える。

- (4) 相原秀二資料は現在、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館の2か所で収蔵されている。但し、それぞれに完全に分けられてはおらず、両者は互いの地域の資料をもっている。また、「エフェクト」製作の基本資料は、広島に多く所蔵されている。

以上から、相原秀二資料については、例えば、

- (1) 現在多くの人々に知られている原爆被災の早い時期の映像資料としての意義や象徴的存在としての検討
- (2) 映画史研究（「エフェクト」を作品として捉えての研究（作品論）／映画製作史／「科学映画」としての検討など）への活用
- (3) 原爆学術調査（科学研究／科学史研究）という側面だけでなく、人的・社会的被害に関する研究への活用

といった面に留意して、アーカイブズ学的な整備や検討をするべきであると考え

る。そして、広島と長崎に物的には分かれてはいるが、両方を合わせて、資料を総合的に捉える必要があると考える。

今後の課題としては、もし可能であれば長崎原爆資料館所蔵の資料の調査をさせていただき、広島平和記念資料館所蔵分との関連を分析したい。

また、相原秀二だけでなく、他の日映関係者も含めて、執筆記事や活動について調査するとともに、「エフェクト」の完成後からの歴史的経緯について調査研究し、最終的には原医研所蔵のフィルム（これは、アメリカから返還されたフィルムの原本である可能性が高い）との関連を明らかにしたい。

#### 参考文献・参考資料

- 加納竜一・水野肇（1965）『ヒロシマ二十年：原爆記録映画製作者の証言』弘文堂、1965年8月5日
- 新聞記事（1967）「幻の原爆映画 22年ぶりに帰国」『朝日新聞』（東京）1967年11月10日朝刊掲載
- 田島英三（1968）「科学映画としての原爆映画」『自然』23（2）、1968年2月、40-42、所収
- 飯島宗一・相原秀二（1981）『写真集 原爆をみつめる：1945年 広島・長崎』岩波書店、1981年7月
- 岡本昌雄（1996）「文化映画時代：十字屋映画部の人びと」東京：ユニ通信社、1996年7月
- 阿部・マーク・ノーネス（1999）「中心にあるかたまり：「広島・長崎における原子爆弾の効果」ミック・ブロデリック編著、柴崎昭則・和波雅子訳『ヒバクシャ・シネマ：日本映画における広島・長崎と核のイメージ』現代書館、1999年8月、

---

pp.111-144.、所収

落葉裕信 (2007) 「相原秀二氏の資料の整理について」『広島平和記念資料館研究報告』第3号、2007年3月、pp.97-104.、所収

西本雅美 (2009) 「幻の被爆映像 5本はどこに」『中国新聞』2009年3月29日朝刊掲載 (以下記載のウェブページを参照した)

村上文昭 (2001) 「原胤昭と耶蘇教書肆十字屋：日本最初のキリスト教出版社」『関東学院教養論集』(11)、2001年3月、pp.1-13.、所収

大矢正人 (2012) 「相原秀二資料に見る長崎原爆の残留放射線」『平和文化研究 (長崎平和文化研究所)』第33集 (2012年11月)、pp.21-72.、所収

吉岡有文 (2017) 「日本科学映画の生みの親 太田仁吉の思索と実践－教育における科学映像メディアの研究－」『人間の福祉：立正大学社会福祉学部紀要』(31)、2017年2月、pp.91-125.、所収

#### 参考にしたウェブページ

「日映アーカイブ」「沿革」<http://www.nichieiarchive.com/history.html>

「中国新聞 ヒロシマ平和メディアセンター」2009年3月29日朝刊掲載記事  
<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=940> (2020年2月14日確認)